大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

情欲の詩学：錢謙益、柳如是、『東山酬和集』窺探

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-04-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大平, 桂一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004272

情欲の詩学――錢謙益、柳如是、『東山酬和集』窺探[1]

嚴　志　雄　　撰
大　平　桂　一　訳

翻訳にあたって

本論文は香港中文大学の嚴志雄教授の著、『牧齋初學集―詩文、生命、身後名』（Oxford大学出版局から2018年に出版された）に収められた文章である。『牧齋初學集――詩文、生命、身後名』の全体像については本年発表予定の大平による書評に譲るが、明末清初にかけて活躍した文壇の大立者錢謙益（号は牧齋）に関連する文章を集めた論文集で、明清文学の研究史に革命をもたらす著作と考える。今回翻訳した「情欲の詩学――錢謙益、柳如是、『東山酬和集』窺探」は、錢謙益とその愛妾柳如是の関係性を論じたもので、彼らが応酬した詩の分析手法は非常に斬新であり、一読に値する。

嚴志雄教授は香港中文大学で修士の学位を得た後、アメリカのイェール大学でPh.Dを取得し、台湾中央研究院中国文哲研究所研究員を経て、現職に就いた。著書に『錢謙益<病榻消寒雜咏>論釋』（2012年 中央研究院聯經出版公司刊）『秋柳的世界清初詩壇側議（2013年 香港中文大學出版社刊）がある。

なお脚注は何も注記していないものは嚴志雄教授の自注、「訳注」と注記したものは大平の注である。大平の注のうち、語釈のほとんどは『漢語大詞典』を参考にした。

本文

明崇禎十三年庚辰（1646）の仲冬、柳如是（1618-1664）は錢謙益（牧齋 1582-1664）を江蘇常熟の虞山半野堂に訪ねた。半年後、二人は茸城の舟の中で結ばれた。柳如是は錢謙益に従って常熟に帰り、錢謙益は彼女のために絳雲樓を半野堂の後ろに建て、彼女を柳夫人と称した。錢謙益に嫁いで、柳氏は十年に及ぶ漂泊生活を終えた。

1　本稿の匿名審査員及び李孝悌教授、黄仕忠教授は本稿に対し貴重なご意見を頂いた。厚く感謝申し上げる。

それよりも前、柳如是はあちこち漂泊して定住しておらず、呉越の間を行ったり来たりしており、虞山に錢謙益を訪ねて初めて一生涯の拠り所を得たのである。当時柳如是は天下に名だたる才妓であり、「從良」（身受け）される以前は、画舫[2]で絶え間なく移動していた。その目的は生涯を託せる男性を探すことにあった。一見したところ、柳如是は当時の他の女性（名家の令嬢）に比較してかなり自由があり、行き先や身受けされる対象を選ぶことができたようである。実を言えば、このような自由と特権は、正常な社会的身分を喪失した代価として初めて得られたものであった。柳如是は妓女であり、正常な社会・道徳・倫理的な価値観の隙間に棲息し活動していた。そのうえ、この画舫を彼女は自分で手配できるはずもなく、一定の期間が経つと、必ず岸に近づき、男性が支配する社会に接近し、進入することによって、生存し続けるための資源と補給を受け取ることができるのであった。この船は、何かを生産するわけではなく、この船とこの世界が交易するのは欲望（desire）であり、この「欲望」とは柳如是自身であった。この綺羅びやかな船は、柳如是の隠喩（metaphor）とみなすことができる。船が水上を移動するときには、John Bergerの所謂男性が注視する「景観」（a sight）となるのだろうか？もしそうなら、その身分の構成は、その「観察者」（surveyor）が規定するのであり、この「観察者」はまた一人の「被観察者」（surveyed）でもあるのだ。John Bergerは言う、「女性自身の観察者は男性であり、被観察者は女性である。というわけで、彼女は自分を（観察の）対象――しかも特殊な視覚の対象である景観――に変化させさせてしまう。」[3]このような理論に導かれて、我々が見る西洋の裸体画の中では、裸婦はよく温和で従順であるか、あるいは誘惑的な視線で額縁の外の鑑賞者（描かれていたのはおそらく絵の買主のブチブルか資産家であったであろう）を見つめている。このような観点は、我々が柳如是という現象について考える際に、一つの出発点を提供してくれるかもしれないのだが、柳如是が引き金を引いた欲望の連鎖と、権力の行使はやや簡略に過ぎるBergerの「觀看之道」（物の見方）をはるかに凌駕している。

柳如是は体を露わにして、鑑賞者に温和で従順な秋波、あるいは誘惑の秋波を送ることができようが、このような屈辱的な行為は、同時に彼女が男性の欲望を操る権力をつかみ取ろうとするものに他ならない。柳如是は有情と無情、真と偽が顛倒した存在である。彼女は時に男性の衣服を身につけ、伝統的な礼教の女性の服装についての規範を

2　訳注：綺羅びやかに飾った船。

3　John Berger, Ways of Seeing（London:British Broadcasting & Penguin Books, 1972）, p.47.中国訳は約翰・伯格著、戴行鉞訳：『觀看之道』（桂林：廣西師範大學出版社、2007年）、47頁。

無視した（それだけでなく武術を習い、侠客の気風も備えていた）。絶世の美貌のほかに、柳氏は「詞翰一時を傾け」、詩詞書画に長じ、学識に富み、音律に詳しく、禅の理論に通じていた[4]。彼女と当時の江南各地の著名な文人との交流は甚だ密であり、錢謙益に出会う数年前には、雲間の陳子龍も短い期間ではあったが柳氏と熱烈な恋愛関係にあった[5]。当時の文士を構成する様々な条件のほとんどを柳氏は備えていたと言っても過言ではないだろう。後に錢謙益は彼女を「柳儒士」（柳如是に類似した音声）と呼んでからかったのも無理はなく、柳氏が擁していた「文化資本」（cultural capital）は確かに男性文士のそれに勝るとも劣らなかった。ある意味において、当時の多くの才士・学士たちが柳氏に傾倒した理由は、柳氏にある種の自画像を見出したからであり、自己識別（self-identification）の結果であった。ところが柳氏が所有していた才識は、あるいは遥かに自らを上回ってさえいたために、自分に「匱乏（か）」けているものに対する焦りもあり、更に柳如是を追い求めたのであった。柳如是はある種の「景観」であり、「景観」よりもさらにスケールの大きい、「景観」を超越した存在であった。欲望が恐ろしいのは、欲望が尽きることなく、人を飽きさせることがないからであり、消えたり生まれたりを繰り返し、聖人でさえも「節」（節制）とか「寡」（寡欲）でコントロールしようとしたのは、それを絶つことができないと知っていたからなのだ。

我々は庚辰の十一月、柳如是が錢謙益を訪ねた当日の現場に立ち戻ろうではないか。錢氏の門人顧苓（1626-1685以後）の記録によると：

> 庚辰の冬、［柳は］扁舟もて宗伯を訪なう。幅巾弓鞵、男子の服を著く。口は便給[6]にして、神情は灑落にして、林下の風有り。宗伯は大いに喜び、天下の風流佳麗は、獨り王修微、楊宛叔と君と鼎足にして三なるべく、何ぞ許霞城、茅止生をして國士名姝の目を耑（もっぱ）らにせしめんやと謂う[7]。

この記述によると、柳如是が乗っていたのは「扁舟」つまり小舟であり、柳如是は画舫や彼女が使える資産、従僕、知悉している環境を離れて、果敢にそして悠然と半野堂へ赴いたことを意味する。（歴史家は興ざめにも、「街の中の水路を画舫は通り抜けられない」と言うだろう。待考。）柳如是は錢謙益に一首の詩を捧げた。その目的は彼にお

4　清顧苓の「河東君小傳」による。范景中・周書田編『柳如是事輯』（杭州中國美術出版社、2002年）５頁。『柳如是別傳』（上海、上海古籍出版社、1980年）375頁。

5　Kang-i Sun Chang, *The Late-Ming Poet Ch'en Tzu-lung: Crises of Love and Loyalism*（New Haven, CT & London: Yale University Press, 1991）；孫康宜、李奭學訳：『陳子龍柳如是詩詞情緣』（臺北：允晨文化實業股份公司、1992年）

6　訳注：言葉が巧みで応答が速い。

7　顧苓の「河東君小傳」、『柳如是事輯』５頁。

べっかを使い彼を誘惑するのが目的だった。その半年後、『東山酬和集』が世に問われ、この書物には彼ら夫婦とその友人や門人たちが唱和した詩が収められている[8]。『東山酬和集』は錢柳の愛情の結晶であると同時に、欲望が籠められた書でもあって、錢氏柳氏の愛情をめぐる相互構造（inter-subjective constitution）が刻み込まれており、詩歌の言語、記述する行為が彼らの愛情の構造（structure of feeling）の中で演じた意味深長な役割の証人となっている。以下、『東山酬和集』の中で最も誘惑と色情のニュアンスに富んだ二組の唱和詩（『東山酬和集』の中の最初と最後の唱和詩でもある）を取り上げて、錢氏柳氏二人が色情のメカニズムと「贈答」の相互構造の中で、各自の主体性をいかに表に出し、構築して行ったかを見ていきたいと思う。さらに『東山酬和集』の権力の外形（configuration）を論じ、この書物が明末の情観[9]（cult of love）文化と情観文化が生まれる場における意義を考察したいと思う。

一、誘惑の芸術、才色芸の誘惑

柳如是が錢謙益に対して、まず最初に献じたのは次のような詩である：

庚辰の仲冬、牧翁を半野堂に訪ない、長句を奉る　河東柳是

聲名真似漢扶風　聲名　真に似たり漢の扶風に

妙理玄規更不同　妙理　玄規　更に同じからず

一室茶香開澹黯　一室の茶香　澹黯を開き

千行墨妙破冥濛　千行の墨妙　冥濛を破る

竺西瓶拂因緣在　竺西の瓶拂　因緣在り

江左風流物論雄　江左の風流　物論雄なり

今日沾沾誡御李　今日　沾沾として誡に李に御（ぎょし）たり

8　金鶴沖撰『錢牧齋先生年譜』庚辰（1640）の条に、「冬十一月、河東君至りて半野堂に止まる。……程孟陽の輩と文讌すること浹月にして、先生は『東山酬和集』を刻す。」とある。清錢謙益著、清錢曾箋注、錢仲聯標校：『錢牧齋全集』の『牧齋雜著』（上海、上海古籍出版社、2003年）附録、937頁。金氏の記述は正しくないと考える。『東山酬和集』の最後の詩は辛巳（1641）六月七日の詩である。『東山酬和集』の前には沈璜の序がついていて、「壬午（1642）元夕、虞山に通訊す、酬和の詩、已に集を成す」とあり、末尾に「崇禎十五年（1641）二月望日」と書かれている。その他、孫永祚の「東山酬和賦」の末尾に「歳は壬午孟陬の月に在り」と書かれている。というわけで、『東山酬和集』は崇禎十五年二月十五日（西暦1642年３月15日）以前に刊行されるはずがない。周書田、范景中輯校『柳如是集』（杭州、中國美術學院出版社、2002年）に収められている清錢謙益、柳如是等著『東山酬和集』の119-120・123頁を参照のこと。

9　訳注：暫時「恋愛信仰」としておく。萩原弘子氏指教。

東山葱嶺莫辭從　東山　葱嶺　従うを辭すること莫かれ[10]

身体と詩的言語を使って誘惑する、男女間の情愛にこれほど相応しいものはないであろう。詩を献ずることもまた有名人に拝謁する際の作法である。このような場面に詩が出現することは、実に的確である。七言律詩の空間は絶句に比して広大なので、かなり巧妙にしかも穏当に作り上げることができる。柳如是はある種の律詩の構造を探し出し、絶対的に穏当な構造と情緒で錢謙益に接近しようと図っているかのようである。そこで、起句は先ず錢氏の声望を取り上げ、彼を後漢の学者馬融に比している。錢氏の深い学識を称賛するのは表の意味で、さらに重要なのは、錢氏の豪放磊落な一面を挑発しているのである。史伝の中の馬融のイメージを見てみよう：

融の才は高く博洽にして、世の通儒と爲り、諸生を教養して、常に千もて數うる有り。涿郡の盧植、北海の鄭玄らは、皆其の徒なり。鼓琴を善くし、好みて笛を吹き、達生にして性に任せ、儒者の節に拘らず。居宇器服、多く侈飾を存す。常に高堂に坐し、絳紗の帳を施し、前にて生徒に授け、後ろにて女樂を列し、弟子は次を以て相い傳え、其の室に入る者有ること鮮なし[11]。

錢氏に、自分を受け入れて、「其の室に入」らせて欲しい、「儒者の節に拘」らず、「前にて生徒に授け、後ろにて女樂を列」して欲しいと要請しているのである。柳如是は「女樂」である。「漢の扶風」の典故を使うことで、柳氏は軽々と自分が安心して暮らせる居場所を作り上げたのである。続いて錢氏の仏学の「妙理玄規」を褒め称えており、馬融さえも仏学の造詣はなかったのであり、この褒め言葉はまさに錢氏が自負していたところを的確に突いている。馬融の典故は、表向きは古代の人物を借りてきて錢氏に喩えているようにみせて、本音では錢氏の「妙理玄規」を語り、それらを詩の第一句第二句に置いたことによって、錢謙益は大いに頷きつつ、「素晴らしい」とつぶやき、その後頭を擡げて柳氏をじっと見つめたであろう。

彼に近づくには、先ず感覚（senses）を用い、その後、本当に彼の身体に体温を感じる距離まで近づいてゆく。室外は十一月の虞山であり、空気は冷たくあたりはほの暗いが、室内は茶の香りに満ちている。冬に出す茶はもちろん温かい。同じ部屋の中で、錢と柳は同じ茶を味わい、快い嗅覚と味覚の感覚にひたり、茶道具をつかむ手に暖かさが伝わる。この茶の味わい、茶の香りには柔らかな皮膚の質感がこもっている。警戒心が薄れて錢氏の心は揺らぎ陶酔し始める。「千行の墨妙　冥濛を破る」は錢氏の著作ある

10　錢謙益、柳如是等『東山酬和集』125頁。
11　南朝宋范曄撰、唐李賢等注、『後漢書』馬融列傳（北京：中華書局、1965年）、巻60、1972頁。

いは書跡を称賛する。しかし、さらに考慮に入れるべきは、二人がこの「墨妙」を鑑賞する位置関係である。錢謙益と柳如是は肩を並べて壁にかかった掛け軸を眺めているのか？そうであるとすると、二人は座席から立ち上がり、お互いに歩み寄って肩を並べて立ったことになる。あるいは柳如是は錢謙益の横に立ち、頭を下げて錢謙益が机の上で筆を走らせているのを見ているのか？あるいは柳氏は錢氏の手から書跡を受け取って見ているのか？たとえ二人がきちんと坐って書跡を見ているにせよ、無意識のうちに体の位置を変えて、視線が瞬間的に交錯したりしているのか？これらのすべての可能性があり、どの可能性にせよ、たとえ二人が体を動かさなかったにせよ、二人の距離が縮まったことに変わりはない。

これに続く一聯では、さらにもう一歩「風流」の「因縁」を煽りたてている。それは業の力かもしれないのだが。柳如是は敬虔な仏教徒であった。柳如是が使った「在」一字はまさに決然たる表現であり、二人の宿縁が早くに決定づけられていたかのような言い方である。この因縁にどうして抵抗できようか？ましてあのような美しい女性であれば。「風流」という言葉は、錢謙益をさらに彼女に服従させたであろう。東晋の謝安は「風流宰相」と呼ばれており、錢謙益は当時「風流教主」と称されていたではないか[12]。風流韻事と錢氏の東林党の首魁・文壇の盟主の身分地位は、明末のこの時期両々相俟って錢氏を有名人にしていた。最後の両句は、柳氏が錢氏に、「李に御たり」のように後輩が先輩に付き従うようにではなく[13]、「東山妓」のように主人に終生身を託したいと単刀直入に述べている。謝安は東山に隠居し、山水を散策するときには必ず妓女を携え、後に「東山再起」し、偉大な功績をあげた。当時錢謙益は官界で失意の状態にあり、郷里に蟄居していたが、「東山再起」の思いは一日も心から離れなかった。柳氏が東山の典故を使って錢氏におもねり、自分は東山の妓女となり錢謙益と「因縁」を結びたいと書いた。このような美しい誘惑に錢氏はどう抵抗できただろう。時に錢謙益は六十歳、人間は美しい晩年にあこがれるものである。

12　清張明弼の「冒姫董小宛傳」に、「虞山錢牧齋先生維(こ)の時惟(た)だ一代の龍門たるのみならず、實に風流教主なり。」とある。「冒姫董小宛傳」は清冒襄輯『同人集』（臺南：莊厳文化事業有限公司、1997年『四庫全書存目叢書』、第385冊據北京師範大學圖書館藏清康熙冒氏水繪庵刻本影印）に収録されている。巻３、43b。

13　東漢荀爽が李膺に拝謁して帰って来て、「沾沾として」喜び、「今日乃ち李君に御たるを得たり」と言った。この故事は『後漢書』李膺列傳に見える。巻67、2191頁。（厳氏はこのように述べるが、訳者は柳如是が先輩後輩の間柄（師匠と弟子の間柄）と謝安と東山妓の間柄を兼ねたいと望んだと解したい。さらに「葱嶺」はパミール高原を指す地名で、玄奘三蔵がインドへの取経の経路に当たるので、仏典についても錢謙益の教えを請いたいという願望をも籠めたものと考えたい。陳寅恪も同じ見方をしているようである。博雅の賜教を俟つ。）

錢謙益は彼女の韻を用いて応答した、その詩は以下のとおりである：

柳如是山堂を過訪し、枉げて詩もて贈らる、語は特に莊雅にして、輙ちに來韻に次して奉答す　牧翁

文君放誕想風流　文君は放誕にして風流を想い

臉際眉間訝許同　臉際　眉間　許(かくのごと)く同じきを訝(いぶか)る

枉自夢刀思燕婉　枉(むだ)に刀を夢みて自り燕婉を思い

還將摶土問鴻濛　還お將に土を摶めて鴻濛に問わんとす（太白「樂府」詩に云う、「女媧黄土を戯び、團めて下愚の人を作る。散じて六合の間に在り、濛濛として沙塵の若し」[14]と。）

霑花丈室何曾染　花を丈室に霑くるも　何ぞ曾て染まらんや

折柳章臺也自雄　柳を章臺に折るも也た自ら雄なり

但似王昌消息好　但だ王昌の消息好(よろ)しきに似たり

履箱擎了便相從　履箱　擎(はこ)び了りて便ちに相い從わん（「河中の水歌」云う、「平頭の奴子履箱を擎(はこ)ぶ」[15]と。）

錢謙益は唱和した詩の詩題の中で、柳氏の原作が「語は特に莊雅にして」と述べているが、体面を保った回答をするための口実に過ぎない。柳氏の作品の末の二句はきっぱりした物言いになっているが、錢氏の作品の「奉答」もまた練りに練った表現となっており、字面の背後には生き生きとして芳香を放つ世界が広がっている。最初の二句は『西京雑記』の文章を若干改めたうえで、前漢の卓文君の典故を用いている：「文君は姣好(うつく)しく、眉色は遠山を望むが如く、臉際は常に芙蓉の如く、肌膚は柔滑なること脂の如し。十七にして寡となり、人と爲りは放誕風流なり。故に長卿の才を悦びて、禮を越ゆ」[16]。ここの「放誕風流」云々を錢の詩は加工して第一句を書いている。錢氏の次の句は柳氏の「臉際」「眉色」あたりの美しさを描いているのだが、原典と併せ読むと、「肌膚は柔滑なること脂の如し」を秘かに内包していることが分かる。詩の冒頭から錢氏は柳氏の肌の肌理(きめ)を想像しているのである。卓文君は「長卿の才を悦びて、禮を越」えたのであるから、柳氏の当時の状況はまさにその通りではなかったであろうか。実を言えば、錢氏と柳氏が唱和した詩は、「禮を越」えた地点と「語は特に莊

14　訳者注：唐李白「上雲樂」、「女媧黄土を戯び、團めて下愚の人を作る。散じて六合の間に在り、濛濛として沙塵の若し。」（『李太白全集』巻三206頁）

15　錢謙益・柳如是撰『東山酬和集』125-126頁。

16　漢劉歆撰晉葛洪輯『西京雑記』（臺北商務印書館、1983年文淵閣『四庫全書』、第1035冊）巻２、3b。

雅」の地点の間をたゆとうているのである。

頷聯の「枉自」の一句は、「刀を夢」にみるという典故に基づいており、その意は唐代元稹の「薛濤に寄贈す」から来ている。

錦江滑膩峨眉秀　錦江の滑膩　峨眉の秀

幻出文君與薛濤　幻出す文君と薛濤とを

言語巧偸鸚鵡舌　言語に巧みなるは鸚鵡の舌を偸むなり

文章分得鳳凰毛　文章は分かち得たり鳳凰の毛

紛紛詞客多停筆　紛紛として詞客は多く筆を停め

箇箇公侯欲夢刀　箇箇の公侯は刀を夢みんと欲す

別後相思隔煙火　別後　相い思えども煙火を隔て

菖蒲花發五雲高　菖蒲の花は發きて五雲高し[17]

薛濤は唐代の名妓であり、文才に富み、詩にも巧みであった。柳如是は当代の風流なる美女であってやはり才芸で賞賛されていたわけだから、錢氏の連想は的確である。この句は、柳氏を慕うものが雲の如く多く、皆少しでも近づきになれれば幸せと考えていたと述べており、元稹の詩に言うところの「紛紛として詞客は多く筆を停め、箇箇の公侯は刀を夢んと欲す」[18]を反映している。元稹の第二句は「文君と薛濤」とあるように二人を列挙している。錢氏が首聯で卓文君の典故を用い、頷聯で薛濤の典故を用いているが、その霊感はおそらく「薛濤に寄贈す」から来ているのに違いない。錢氏の首聯の第二句には「肌膚は柔滑なること脂の如し」という隠れたテキスト（sub-text）があるのだが、頷聯で「夢刀」の典故を用いているため、元稹の「薛濤に寄贈す」詩に連想が働いていって、「肌の肌理（きめ）」のイメージがここでまた出現してくる。元稹は首聯で「錦江の滑膩　峨眉の秀、幻出す文君と薛濤とを」と書いているが、錢氏はそれを加工して用い、またもや柳如是の「錦江滑膩」と形容されるきめ細かな肌を持つ身体を幻視している。「還お將に」の一句は錢氏に自注があり、李白の「樂府」詩を用いたことを明かし、暗に柳如是の気さくで活発な性格と世人を惑わし、国を傾けるに足る美貌を暗示してい

17　『唐詩紀事』に「微之西蜀の薛濤辭辯有ると聞き、監察と爲りて蜀に使いするに及びて、御史の推鞫を以て、見るを得ること難し。嚴司空は潛かに其の意を知り、毎に薛をして往かしむ。翰林に登るに洎び、詩を以て寄せて曰く……。」とある。宋計有功『唐詩紀事』（文淵閣『四庫全書』、第1497冊）巻37、2a。

18　「夢刀」は益州あるいは蜀の地を指す。『晉書』王濬列傳に、「濬は夜三刀の臥屋梁上に懸るを夢む、須臾にして又た一刀を益す。濬驚きて覺め意甚だこれを惡（にく）む。主簿李毅再拜して賀して曰く、「三刀は州字爲り、又た一を益すは、明府其れ益州に臨むことあらんや」と。賊張弘益州刺史皇甫晏を殺すに及ぶや、果して濬を遷して益州刺史と爲す。」とある。唐房玄武齡等撰『晉書』王濬列傳（北京、中華書局1995）、巻42　1208頁。

る。錢氏は続けて、頸聯で他人は彼女に傾倒しているが、私は醒めていると表明し、わざと一歩退いて距離を保った後、再び柳氏に逼る。

頸聯の「霑花」と「折柳」はそれぞれ別の二つの典故を使っている。「霑花」は「天女散花」の意味である。仏典には、維摩詰の方丈で天女が花を諸菩薩、仏の弟子の身体に散らしたところ、菩薩の身体からは花が落ち、弟子たちの身体には付着して落ちなかった。弟子たちはまだ分別心が起こり、結習が尽きていなかったためである[19]。錢謙益の詩で「何ぞ曾て染まらん」というのは、花をまく天女のように美しい柳如是に惑わされてはいないぞと宣言しているのである。しかし、錢氏は対句の中でなんと唐代の韓翃の故事を用いる。対句の前半では柳如是を押しやり、後半ではまた柳如是を引き寄せる。唐代孟棨『本事詩』に次のような記事がある。

韓翃に寵姫柳氏有り、翃名を成すや、辟に淄青に従い、これを都下に置く。數歳、詩を寄せて曰く、「章臺の柳、章臺の柳、往日の青青　今在るや否や？縱(たと)い長條は舊垂に似るも、亦た應に他人の手に攀折せらるべし」と。柳も復た答詩を書きて曰く、「楊柳の枝、芳菲の節、恨む可し年年離別を贈らるるを。一葉風に隨いて忽ち秋を報じ、縱(たと)い君來るも豈に折るに堪えん」と[20]。

原典では、韓翃は柳氏がすでに他人に「折」られたことを恨んで、もはや彼女を愛さない。錢牧齋はなんとその意味を反対に用いて、柳如是は芸妓出身で、以前は風流韻事が多かっただろうが、自分はそれを気にせず、目の前の柳の枝を手で折るのも雄挙（スケールの大きな行動）の一種としている。

錢謙益の尾聯もまた二つの典故が隠されている。李商隱の「代應」詩に次のようにある：

本來銀漢是紅牆　本來　銀漢は是れ紅牆なり

19　『維摩詰所説經』巻中「觀眾生品」に云う、「時に維摩詰の室に一天女有り、諸大人の説く所の法を見て、便ち其の身を現し、即ち天華を以て諸菩薩と大弟子の上に散らす。華は諸菩薩に至らば、即ちに皆堕落し、大弟子に至らば、便ち著きて堕ちず。一切の弟子は神力もて華を去らんとするも、去らしむること能わず。爾の時天女は舍利佛に問う、「何故に華を去らんとするや？」答えて曰く、「此の華は法の如(ごと)からず、是を以てこれを去らんとす」と。天曰く、「此の華法の如からずと爲す勿れ。所以は何ぞ？若し佛法出家に於いて、分別する所有らば、法の如からずと爲す。若し分別する所無ければ、是れ則ち法の如し。諸菩薩華著かざる者を觀るに、已に一切の分別想を斷つが故なり。譬うれば人畏るる時、人は其の便を得るに非ざるが如し。是の如く弟子死を畏るるが故に、色・聲・香・味・觸其の便を得るなり。已に畏を離るる者は、一切の五欲は爲す能う無きなり。結習未だ盡きざれば、華身に著くのみ。結習盡くる者は、華著かざるなり」と。」姚秦鳩摩羅什訳『維摩詰所説經』「觀眾生品第七」（CBETA電子佛典V1.13普及版『大正新脩大藏經』第14冊）、第475號、巻中。

20　唐孟棨撰、『本事詩』（文淵閣『四庫全書』第1487冊）6a。

隔得盧家白玉堂　隔て得たり盧家の白玉堂

誰與王昌報消息　誰か王昌の與に消息を報ぜんや

盡知三十六鴛鴦　盡(ことごと)く三十六鴛鴦を知ると[21]

王昌の事跡は史上あまり知られていないが、唐詩の中ではしばしば言及され、女性の思い人の代替物（stock image）となっている。錢氏は「代應」の詩意を用いてはいるが、「但似」で始めているということは、なお決めかねているというニュアンスがあったのだろうか？あるいは何か妨げになる事情があったのだろうか？「代應」詩から「三十六鴛鴦」というイメージを受け継いでいることから、錢氏がすでに柳氏と鴛鴦の佳侶となろう意思表示を行っているのは明らかである。詩の結句は『樂府詩集』梁の武帝蕭衍の「河中之水歌」の詩意を用いていて、錢氏は自注で「平頭の奴子　履箱を擎(はこ)ぶ」の一句を引いている。「河中之水歌」の全詩は以下の通り：

河中之水向東流　河中の水は東に向いて流る

洛陽女兒名莫愁　洛陽の女兒　名は莫愁

莫愁十三能織綺　莫愁　十三にして能く綺を織り

十四采桑南陌頭　十四にして桑を南陌の頭に采る

十五嫁爲盧家婦　十五にして嫁して盧家の婦と爲り

十六生兒字阿侯　十六にして兒を生みて阿侯と字(な)づく

盧家蘭室桂爲梁　盧家の蘭室は桂を梁と爲し

中有鬱金蘇合香　中に鬱金蘇合の香有り

頭上金釵十二行　頭上の金釵は十二行

足下絲履五文章　足下の絲履は五文章

珊瑚掛鏡爛生光　珊瑚　鏡を掛けて爛として光を生ず

平頭奴子擎履箱　平頭の奴子　履箱を擎(はこ)ぶ

人生富貴何所望　人生の富貴何の望む所ぞ

恨不早嫁東家王　早くに東家の王に嫁ざるを恨む[22]

第一句の「河中の水は東に向いて東流る」はうまい具合に柳氏の「河東」という名を隠しているし、錢氏がこの詩を使っているのは、巧妙な手際といえよう。錢氏の尾聯の第一句の原典[23]には「隔て得たり盧家の白玉堂」が含まれていたし、この句で使った典故でも「盧家の蘭室」が詠われているので、前後のイメージがきちんと照応している。

21　唐李商隱撰清代の朱鶴齡注『李義山詩集注』（文淵閣『四庫全書』、第1082冊）、巻１下、42b。

22　宋郭茂倩、『樂府詩集』（文淵閣『四庫全書』、第1347-1348冊）、巻85、17b。

23　訳注：前出の李商隱の「代應」詩。

李商隱と蕭衍の二つの詩を併せ読むと、二人の間の「消息」はなかなかよろしく、柳氏の平頭奴子[24]はまもなく「履箱」を錢謙益の家に運びこむのであろう。

二、古い友人の欲望：記憶と抑圧

『東山酬和集』における錢柳の最初の唱和詩に対し、続けて次韻唱和したのは程嘉燧（1565-1644）であった[25]。錢謙益と程嘉燧は兄弟同然の友人で、二人の真摯な友情は当時も後世においても美談として伝わっている。程氏は1644年になくなり、その十二年後、錢謙益は程嘉燧の遺稿『耦耕堂集』のために序文を書いた。耦耕堂は、実は錢謙益が自分の荘園の中に程嘉燧のために建てた別荘であった。「耦耕堂は虞山の西麓下に在り、余（錢謙益）と孟陽（程嘉燧）の讀書結隱の地なり。」[26]錢謙益は嘗て程嘉燧との以前の「讀書結隱」の情誼を追憶し、「耦耕」の意味を以下のように記述している：

> 天啓の初め、孟陽は澤潞自り歸り、余と偕に拂水に棲む。磵泉活活として屋下を循り、春水怒生し、懸流噴激す。孟陽これを樂しみ、亭を爲りて以て磵の右に踞らしめ、これに顔きて聞詠と曰う。又長廊を爲りて以て北山に面し、行吟坐臥、皆山と接す。朝陽榭、秋水閣次第に落成す。是に於いて耦耕堂の名は、遂に孟陽の名を假りて以て四方に聞こゆ。既にして形家[27]の言に従いて、斥きて墓田と爲し、明發堂を西偏に作り、耦耕堂を丙舍に徙し、以て孟陽を招く。廬居屋を比べ、晨夕晤對し、其の游從すること最も密と爲す。……此の集は則ち天啓自り崇禎に迄るあいだ、拂水卜居、松圓終老の作なり。總べてこれに名づけて「耦耕」と曰う者は、孟陽の志なり。余孟陽と相い耦耕に依る者は、前後十有餘載なり[28]。

錢氏と程氏の友情の深さ、情誼の真の一端を見ることができる。『耦耕堂集』は程嘉燧が生前錢氏に捧げた最後の心情といえるだろう。程氏が亡くなるふた月前に書いた「耦耕堂集自序」にこうある：

> 余既に山中に歸り、暇日遺忘を追錄し、數年來の詩文を輯めて二帙と爲す。會ま虞山『初學集』を刻して就に成らんとし、書來りて序を索むること甚だ亟しばなり。自ら衰病にして、復た東下すること能わず、就ち終老を見るを念い、遂に是の編を以てこ

24　訳注：頭に冠や頭巾をかぶっていない召使。
25　錢謙益と程嘉燧の関係については、大木康「錢謙益と程嘉燧」（『東方學』第百三十六輯所収 2018年７月）に詳しい。
26　錢謙益『錢牧齋全集』の『有學集』巻18、782頁。
27　訳注：風水師を指す。
28　錢謙益『錢牧齋全集』の『有學集』巻18、782頁。

れに寓(よ)せ、略ぼ數年の踪跡を巻端に序し、故人をしてこれを見しめ、庶わくは一夕の面談に當(あた)りて、因りて以て予の老年轉た愁寂に徙り、筆墨の零落すること此の如きを見しむ、或いはこれが爲に慨然として太息せんことを[29]。

錢氏は『列朝詩集』松圓詩老小傳の中で、「［程］卒するの前一月、余の爲に『列朝詩集』に序す、蓋し絶筆なり。」[30]と述べており、程氏は最後にやはり錢謙益の『初學集』に序言を書いており、この文章こそ、程氏生涯の絶筆であったであろう。

程嘉燧が最後に錢氏を虞山半野に訪れたのは、庚辰の仲冬でありちょうどその時、柳如是も足取り軽やかにやって来た。錢柳二人が詩を作り終わり筆を置くと、程氏は次韻して彼らに贈った。全部で二首あり、其のうちの一つを以下にあげる：

半野堂にて柳如是に値うを喜ぶ、牧翁に韻を用いて贈り奉る　偈菴程嘉燧

翩然水上見驚鴻　翩然として水上に驚鴻を見る

把燭聽詩訝許同　燭を把りて詩を聽き許(かくのこと)く同じきを訝(いぶか)る

何意病夫焚筆後　何ぞ意わんや病夫筆を焚きて後

卻憐才子掃眉中　卻(かえ)って憐れむ才子　眉を掃く中

菖蒲花發公卿夢　菖蒲　花は發く　公卿の夢

芍藥春懷士女風　芍藥　春に懷く　士女の風

此夕尊前相料理　此の夕　尊前に相い料理す

故應惱徹白頭翁　故に應に白頭翁を惱徹せしむべし[31]

この一首は実に余韻のある作品である。柳如是は程嘉燧の古い知り合いであった。柳如是が錢謙益に拝謁する数年前に、彼女は二度嘉定に行き（1634年、1636年の二度である[32]）、当地の文人たちと宴を開き詩の応酬を行った。二度目に嘉定を訪れた時には程嘉燧宅に二泊したこともあった。

その時、程嘉燧は狂ったように柳如是に恋をした。『耦耕堂集』の「詩巻中」には、柳如是に関わる詩が二十数首あり、作詩の時期が最も早いのは一題八首の「朝雲詩」であり、柳如是が最初に嘉定を訪れた時の状況を詠じている。時に柳如是は17歳であり、程氏は七十歳であった。歴史家の陳寅恪は嘗て「上海合衆圖書館藏耦耕堂存稿鈔本上中下三巻。其の中巻に朝雲詩八首（孟陽の婿孫石甫介藏鈔本、題は「艷詩」に作る。刻本

29　明程嘉燧：「自序」、『耦耕堂集』（北京：北京出版社、2005年『四庫禁燬叢刊補編』第67冊據上海圖書館藏清順治十二年（1655）刻本影印）1b-2a（92-93頁）。

30　錢謙益著：『列朝詩集小傳』（上海古籍出版社、1983年）丁集下、577頁。

31　錢謙益、柳如是等『東山酬和集』126頁。

32　この部分は陳寅恪の考証に依拠している。『柳如是別傳』「河東君嘉定之游」の一節、142-234頁。

鈔補は「朝雲詩」に作る。此の原鈔本は、本と「朝雲詩」に作るも、旁には朱筆にて「伎席」二字に塗改す。……）……。」と観察している[33]。二年後、初春のころ、柳如是は再度嘉定に姿を現し、彼女が嘉定を離れたのち、程氏は再び「緪雲詩」を作った。やはり一題八首で、これも華麗な作品である。

程氏の「半野堂にて柳如是に値(あ)うを喜ぶ、牧翁に韻を用いて贈り奉る」の第一首にとって強い関連性のあるテキスト（inter-text）はなんと上述の「伎席」の「艶詩」である。「朝雲詩」其の一をご覧あれ：

買斷鉛紅爲送春　鉛紅を買斷するは春を送らんが爲なり
殷勤料理白頭人　殷勤に料理す白頭の人
薔薇開遍東山下　薔薇　開きて遍ねし東山の下
芍藥携將南浦津　芍藥　携將(たずさ)えたり南浦の津
香澤暗菲羅袂解　香澤　暗に菲(うす)くして羅袂解かれ
歌梁聲揭翠眉顰　歌梁　聲は揭(あが)りて翠眉顰む
癲狂真被尋花惱　癲狂　真に花を尋ねて惱まされ
出飲空床動涉旬　出飲して床を空しくすること動(やや)もすれば旬に涉る

其の四：

邀得佳人秉燭同　佳人を邀(むか)え得て燭を秉りて同にす
清水寒瑛玉壺空　清水　寒瑛として玉壺空し
春心省識千金夜　春心　省識す千金の夜
皓齒看生四座風　皓齒　看て生ず四座の風
送喜觥舩飛鑿落　喜びを送る觥舩[34]は鑿落[35]を飛ばし
助情絃管鬬玲瓏　情を助ける絃管は玲瓏[36]を鬬(たたか)わす
天魔似欲窺禪悅　天魔　禪悅を窺(うか)がわんと欲するに似て
亂散諸花丈室中　亂(みだ)りに諸花を丈室中に散らす

33　同前注。
34　訳注：大杯。
35　訳注：金銀で飾りをつけた盃。
36　訳注：唐代の歌妓商玲瓏を指す。唐白居易「醉歌」詩に「胡琴を罷め、秦瑟を掩い、玲瓏　再拜して歌初めて畢む。誰か道う使君歌を解せずと、黄雞と白日を唱うを聽く」とある。

其の五

城晩舟廻一水香　城は晩(くれ)て舟は廻り一水香り

被花惱徹只癲狂　花に惱徹せられて只だ癲狂たり

蘭膏初上脩蛾睩　蘭膏[37]　初めて上りて蛾睩[38]を脩め

粉汗微消半額黄　粉汗　微かに消えて額黄[39]半ばなり

主客琅玕情爛熳　主客　琅玕　情は爛熳たり

神仙氷雪戲迷藏　神仙　氷雪　戲れは迷藏なり

誰能載妓隨波去　誰か能く妓を載せて波に隨いて去り

長醉佳人錦瑟傍　長(とこし)えに佳人錦瑟の傍らに醉うや[40]

「緪雲詩」其の三

朝簷天外鵲來聲　朝簷　天外　鵲來たるの聲[41]

夜燭花前太喜生　夜燭　花前　太だ喜ばし

婪尾宴收燈放節　婪尾[42]　宴收まりて燈は節を放ち

埽眉人到月添明　埽眉の人到りて月は明るさを添ず

香塵澒洞歌梅合　香塵　澒洞[43]として梅を歌いて合し

釵影差池宿燕爭　釵影　差池として燕を宿しめて爭う

等待揭天絲管沸　天に揭(あが)る絲管[44]の沸くを等(ま)待ちて

綵雲緪定不教行　綵雲を緪(つな)ぎ定めて行かしめざらん

其の四

梅飄粧粉聽無聲　梅に粧粉飄いて聽くに聲無く

柳著鵞黄看漸生　柳に鵞黄著きて看(み)すみす生ず

雷茁玉尖梳底出　雷茁　玉尖[45]　梳底より出づ

37　訳注：「蘭膏」は髪につける香油。

38　訳注：「蛾睩」は女性の美しさを形容する言葉。

39　訳注：「額黄」は女性の化粧で額に黄色の彩色を施すこと。

40　程嘉燧『耦耕堂集』耦耕堂詩巻中、7b-8b（111頁）

41　訳注：「鵲」は俗に良い知らせをもたらすとされる。ここではもちろん柳如是の到来をあらかじめ知らせたのである。

42　訳注：酒が末座まで廻ること。

43　訳注：果てしなく広がること。

44　訳注：「絲管」は管弦楽器、もしくはそれが奏でる音楽を指す。

45　訳注：細長く白い手の指。

雲堆煤黛晝中明　雲堆[46]　煤黛[47]　晝中に明らかなり

不嫌晝漏三眠促　嫌わず　晝漏[48]　三眠[49]　促すを

方信春宵一刻爭　方(はじ)めて信ず　春宵　一刻を爭うを

背立東風意無限　東風に背立すれば意は無限なり

袚腰珠壓麗人行　袚腰[50]　珠は壓す　麗人行[51]

程嘉燧『耕耕堂集』の中で柳如是の事跡に関わるものについては、陳寅恪『柳如是別傳』が詳細を尽くして考証しており、参考にされたい。陳氏によると、「朝雲詩」の前半五首は、柳氏が初めて嘉定を訪れ、当地の有力な文人たちと詩文の応酬をしたり交際したりした際の様子を描写しており、四首目は程氏が柳氏を招いて夜灯りを灯し、宴を開いた時の状況を詠じている。「絪雲詩」八首が詠じているのは、柳氏の二回目の嘉定訪問であり、第三首、第四首の二首は、柳氏が程氏の家に宿泊した折の出来事の実録である。もしも陳氏の仮説が正しければ、嘉定の文人たちと程氏が柳氏のスカートの前にひれ伏した荒唐無稽な場面を詩の中からはっきりと読み取れることになる[52]。

意外にも、一別以来数年がたって、程氏が柳氏に再会したのは、なんと柳氏が錢氏に拝謁し、生涯を託したいと告白したちょうどその折だった。どうして悔しい気持ちを抑えられようか？程氏が唱和した詩の前四句は、記憶の泥沼に深く浸りきっており、あれやこれや思いだされて、抜け出せなくなっている。「翩然として水上に驚鴻を見る」は曹植の「洛神賦」に基づく。「其の形や、翩たること驚鴻の若く、婉たること游龍の若く、榮は秋菊よりも曜き、華は春松よりも茂り、髣髴たること輕雲の月を蔽うがごとく、飄颻たること流風の雪を廻らすが若し。」[53]柳如是を洛神に比擬するのであれば、賦の中で言う「余の情は其の淑美を悅び、心は振蕩して怡ばず」といった情緒を免れないであろう。当時程氏は柳如是を「雲生」、「雲娃」、「楊朝」と呼んでいた[54]。

「燭を把りて詩を聽き許(かくのごと)く同じきを訝(いぶか)る」その時、柳氏は程氏の住まいを訪れて夜と

46　訳注：雲なす髪。

47　訳注：眉墨。

48　訳注：晝漏は昼間の時間を指す。

49　訳注：三眠は檉柳（即人柳）の柔弱な枝が風に吹かれて常に倒れ伏すことをいう。

50　訳注：スカートのベルトを言う。杜甫の「麗人行」に、「背後何の見る所ぞ、珠は腰袚を壓して穩やかに身に稱う」とある。

51　程嘉燧『耕耕堂集』耕耕堂詩巻中、15a-b（115頁）

52　詳しくは陳氏『柳如是別傳』163頁、169-183頁、201-212頁を参照。

53　南朝梁蕭統撰、唐李善・呂延濟等注『六臣注文選』（文淵閣『四庫全書』第1330-1331冊）、巻19、19a-b。

54　これらのいくつかの名前はすべて程嘉燧の各詩題に見える。

もに酒を飲み、程氏の家に宿泊した。程氏は狂わんばかりに喜悦し、後からその折のことを追憶して書いたこの詩の表現には情熱が溢れている。「佳人を邀え得て燭を秉りて同にす、清氷　寒瑛として玉壺空し」「朝簷　天外より　鵲來たるの聲、燭　花前　太だ喜ばし」などがそれに当たる。柳氏と部屋をともにした程氏は、「嫌わず　晝漏　三眠を促すを、方(はじ)めて信ず　春宵　一刻を爭うを」という感慨をもらしている。その時の気持ちは現在の「何ぞ意わんや病夫筆を焚きて後、卻(かえ)って憐れむ才子　掃眉中」に表現されている。柳氏の才気、芸、容貌はすべて世にも稀であり、自分が古希の老人で、女性と愛を語るには適さないことを忘れさせてしまうのである。佳人を招くことができたので、あたりの情景は一変し、すべて麗しくなり、「埽眉の人到りて月　明を添う」という次第。程氏は晩年に、世俗の思念を捨て去り、禅の境地に帰依しようとしたが、柳氏の出現によって、心が大いに乱れ、自己制御できなくなり、まったく「天魔　禪悦を窺かんと欲するに似て、亂(みだ)りに諸花を丈室中に散らす」という体たらく。天花が落ちてくると、維摩詰の丈室の中の弟子たちは「神力もて華を去らんとするも、去らしむること能わず」であったが、程氏はこの天花が身体から離れぬように祈り、「天に揭(あが)る絲管の沸くを等待(ま)ちて、綵雲を綰(つな)ぎ定めて行かしめざらん」という為体であった。残りの人生も短いというのに（花痕月片、無多風月）、彼の痴情執念がここまで激しいとは！程氏の酬和した詩の頸聯には、「菖蒲　花は發く公卿の夢、芍藥　春に懷しむ士女の風」とある。これを読む時、私は先に引用した元稹の「薛濤に寄す」詩の末尾、「別後　相思えども煙火を隔て、菖蒲の花は發(ひら)きて五雲高し」[55]を連想しないではいられない。別れた後も綿々と彼女のことを思い続け、その思いは尽きることがないのである。

回想からふと我に返れば、今宵は何という夕べだろう？なぜこんなに思いが乱れるのか?程氏はその詩を「此の夕　尊前に相い料理す、故に應に白頭翁を惱徹せしむべし」で歌いおさめている。当時程嘉燧は、「花に惱徹せられて只だ癲狂たり」「癲狂　真に花を尋ねて惱まされ」ていたため、「殷勤に料理(からかわ)」れていた「白頭の人」であった。ただその日の夕刻の半野堂における白頭翁は、往時を回想し、密かに深く情を通じて愛の頂点にいた錢氏柳氏二人を前にしては、どうして再び「惱徹」しないでいられようか？しかし今回の「惱徹」には、酸っぱく苦い味が含まれていたことだろう。

思い出が蘇って来て、程嘉燧は急いで筆をとってさらに唱和詩を一首書き付けた：

牧翁の韻に次して再び贈る　偈菴

居然林下有家風　居然　林下[56]　家風有り

55　「薛濤傳」は唐薛濤・李冶撰『薛濤李冶詩集』（文淵閣『四庫全書』、第1332冊）、1bに見える。

誰謂千金一笑同　誰か謂う　千金　一笑に同じと

杯近仙源花瀲瀲　杯は仙源に近く花は瀲瀲たり

（半野堂は桃源磵に近し、故に云う）

雲來神峽雨濛濛　雲は神峽に來りて雨は濛濛たり

彈絲吹竹吟偏好　絲を彈き竹を吹きて吟は偏えに好しく

抉石錐沙畫更雄　石を抉（うが）ち沙を錐（さ）し畫は更に雄たり

詩酒已無驅使分　詩酒　已に驅使するの分無く

熏鑪茗盌得相從　熏鑪　茗盌　相い從うを得ん[57]

程氏の第一首は非常に無礼で、錢柳の感情に配慮を欠いており、軽くとも二人に気まずい思いをさせ、どう反応していいか分からなくさせたであろうし、重ければ、錢氏の感情を傷つけたことであろう。程氏はすぐに語調を調整し、空気を和らげるために、その場をうまく収める手段を模索する必要があった。

これは巧妙で穏当で、分かり易い詩である。首聯では、古代の才女謝道韞の「林下の風」を借りてきて、柳氏の「神情散朗」な風采と、衆に秀でた才華に喩えている。謝道韞には「未だ柳絮の風に因りて起つに如かず」と即興で口にする機智があり[58]、またこの会話の中には「柳」の一字が含まれており、「林下の風」の典故を用いたのは賢明な策と言えるし、彼女の「一笑」は千金でも購えないと述べる。頷聯は、千金でも「一笑」を購えないはずの柳如是が、今は半野堂主人の錢謙益に自ら接近しようとしている意味である。第三句の後に、程嘉燧は自注を付けていて、「半野堂は桃源磵に近し、故に云う」とある。桃源磵は半野堂の近くに在るのだから、この句の意味するところは誰でも知っているのに、何故自注を付ける必要があるのだろうか？程氏がこの数文字を付け加えたのは、今詠じているのはすべて柳如是と錢謙益のこと（情事）であり、自分がこの才女に横恋慕しているのではないと表明するためであった。『耦耕堂集』のこの詩には異文（ヴァリアント）があり、「舟泊は桃源嶺に近しとは劉阮の事を用う」とある[59]。「劉阮の事」とは、晉代干寶が著した『搜神記』に収められている劉晨と阮肇が天台山の桃の花が咲き乱れる谷を遡って仙人に遭遇したという典故を指す[60]。おそらく程嘉燧は「半

56　訳注：ここは東晋の女性謝道蘊の典故を用いる。『世説新語』賢媛篇に、「王夫人は神情散朗たり、故に林下の風氣有り」とある。

57　錢謙益・柳如是撰『東山酬和集』126頁。

58　南朝宋劉義慶撰、南朝梁劉孝標注『世説新語』（文淵閣『四庫全書』第1035冊）、巻上之上、49a。

59　程嘉燧『耦耕堂集』耦耕堂詩巻下、19-b（127頁）

野堂は桃源磵に近し」云々は、表現が稚拙であると思い、後に『耦耕堂集』を編纂した時に「舟泊」以下の数語に差し替えたのであろう。「劉阮の事」を用いるほうが、少なくともここにただよう雰囲気が良くなるではないか。なにはともあれ、ここに「半野堂は桃源磵に近し」という声明（disclaimer）があるので、「雲は神峽に來りて雨は濛濛たり」の収まりがかなりよくなる。宋玉の「高唐賦」に、「妾は巫山の女なり……願わくは枕席を薦めんとす。……妾は巫山の陽、高丘の岨に在り。旦には朝雲と爲り、暮には行雨と爲る。朝朝暮暮、陽臺の下にあり」とある[61]。程嘉燧のこの句にはもちろんこのような華美艶麗な幻想が含まれており、詩句とその出典にはさらに柳氏の旧名である「朝雲」、「楊朝」、「雲娟」が隠されている。しかしすでに今この神女が首ったけなのは半野堂主人だと暗示してしまっているので、巫山雲雨にちょっと言及しても、たいした傷にはならないのである。頸聯の「吟は偏えに好しく」と「畫は更に雄たり」の二句は柳氏の才芸を詠ずる。柳氏はもとより歌舞音曲に通暁しているが、それは誰もが知っており、言うには及ばない。しかし程氏は特にその詩詞に対する造詣が非凡であると指摘する。「石を抉（うが）ち沙を錐ち畫は更に雄なり」は、柳氏の書法が力強く華麗であると賛美する。「怒猊石を抉（うが）つ」というのは、怒りに駆られた獅子が足で石に穴をあけるという意味で、唐人が徐浩の書法を評した言葉であり、筆遣いの力強さを喩えている。さらに黄庭堅が「王氏［羲之］の書法、以爲らく錐の沙を畫つが如く、印泥に印（しる）すが如し。蓋し鋒を筆中に藏し、意は筆前に在るを言うなり」と述べている[62]。『耦耕堂集』ではこの句の後に小注が付いていて、「柳氏の楷法は瘦勁なり云々」とある[63]。

程氏の詩で最も重要なのは、おそらく最後の二句であろう。自分が「詩酒　已に驅使するの分無く」であると述べ、風流韻事に関して、すでに分を超えた妄想はしないと暗示している。これ以後錢氏柳氏と共に過ごす時間は「熏鑪茗盌」（香炉や茶碗）の雅（みやび）な遊びのお相伴をするだけであり、禅の修行をする老人として自分を扱ってくれと言っている。

程嘉燧は一たび深くお辞儀をして、錢謙益と柳如是がたった今演じているお芝居から退場しようとしているのである。

60　訳注：「劉阮」は後漢の劉晨と阮肇の事を指す。永平年間、彼らは薬草をとるために天台山に入り、道に迷っていると二人の仙女に出会い、半年間をブラブラして過ごした。実家に帰ってみるとすでに宋代になっており七代後の子孫になっていたという。この話は『幽明錄』にも収められている。

61　『六臣注文選』巻19、1b-2a。

62　宋黄庭堅「題縫本帖」、『山谷集』（文淵閣『四庫全書』第1113冊）、巻28、9a。

63　程嘉燧『耦耕堂集』耦耕堂詩巻下、19b（127頁）

三、欲望の距離：身体そして意淫

柳如是は庚辰の年十一月に虞山を訪れた折の、錢・柳・程の三人が唱和した詩についてはすでに述べたとおりである。ひと月もしないうちに、錢氏は「寒夕の文讌、再び前韻に疊す。是の日我聞室落成し、河東君を延きてこれに居らしむ」詩を作り、詩の後ろに「涂月二日」と自署した、すなわち十二月二日である[64]。我聞室（柳氏の号は我聞居士であった）は、錢氏が自分の本宅である拂水山荘から遠くない場所に柳氏のために建てた新居で、その完成の早さからは、錢氏の柳氏への深い傾倒と、彼女を身辺に留めたいという切なる気持ち（程嘉燧の詩に云う「綵雲を絙ぎ定めて行かしめざらん」という情熱に匹敵するであろう）が窺える。柳氏はそこで我聞室に住むこととなり、錢氏と柳氏及び友人たちはここで酒を酌み交わし詩を作り、帰るのを忘れるほど楽しい時を過ごした。辛巳の年（1641）正月、錢氏と柳氏は手を携えて杭州などの地をひと月余りかけてまわり、嘉興の南湖まで来て、二人は一旦別れ、柳氏は「鴛鴦湖舟中にて牧翁を新安に送る」詩を作り、錢氏は黄山へ向かい、柳氏は暫くの間松江へ帰っていた。六月、錢氏は柳氏を娶り、「六月七日河東君を雲間に迎え、喜びて述ぶる有り四首」を書いた。『東山酬和集』では、この詩の前にあるのは、錢柳のひと組の唱和詩である。一つの題で四首あり、形式は絶句、錢氏が先ず詩を詠じ、柳氏が遠方からそれに和した。この八首は『東山酬和集』の中で、錢柳の色情が最も燃え盛った作品となっている。その時、錢氏は黄山の宿に宿泊し、温泉の楽しみを享受していた。入浴が終わりゆったりしたところで、筆を揮って「禊後五日、黄山下の湯池に浴し、四絶句を留題し、遥かに河東君に寄す」を書き、茸城に身を寄せている柳如是に郵送した。この詩は華麗さを極め、柳如是の身体を想像している。柳氏の唱和詩は、「黄山湯池よりの留題遙寄の作に和し奉る」と題され、錢氏の作と同じく四首からなるが、詩にこめられたイメージと修辞は、錢氏の作と比較するとより大胆で、より機知（エスプリ）に富んでいる。

錢氏の第一首に云う：

香溪禊後試温湯　香溪に禊して後　温湯を試む

寒食東風谷水陽　寒食　東風　谷水の陽

卻憶春衫新浴後　卻って憶う春衫　新浴の後

竊黄淺絳道家裝　竊黄[65]淺絳の道家裝なるを[66]

詩のイメージはある種の温暖な感覚を醸し出しており、この特徴は「温湯」という

64　錢謙益・柳如是撰『東山酬和集』128頁。

言葉から来ている。三月の初めに「温湯」を試み、入浴後には全身がリラックスした感覚に浸りきって、「春衫　新浴の後」の柳如是を思い起こす。ここでは柳氏の「春衫」を「竊黄淺絳の道家裝」であると描写しているだけである。入浴後に道家スタイルの服装を身につけるのは、おそらくその服装がゆったりと身体にフィットしているからであろう。柳氏の「春衫」の下の身体が詩全体をおおいつくす気だるく温かな感覚の中に見え隠れしている。「道家裝」は本来清潔感を与えるのであるが、ここに出現してみると、背徳的な感じがするではないか。「新浴の後」と述べているだけだが、入浴の前、入浴中はどうか？それを見ている人はいるのか？目の前の光景はどうか？どう想像をめぐらせるにせよ、柳如是の身体はまさに生けるが如く、見え隠れしている。

柳如是が錢謙益に唱和した作は：

素女千年供奉湯　素女は千年　湯に供奉す

拍浮渾似踏春陽　拍浮[67]は渾べて春陽を踏むに似たり

可憐蘭澤都無分　憐れむ可し蘭澤　都べて分無く

宋玉何繇賦薄裝　宋玉は何に繇りてか薄裝を賦さん[68]

柳氏の詩の第一句の最初の二字は「素女」であり、その大胆さは人目を引く。伝説の中の素女は音楽に精通し、陰陽・天道に通暁し、そのうえ閨房の術に長けている。柳氏は、錢氏の伴をして入浴しているのはなんと素女であると設定している。第二句は「拍浮」が登場し、凝視の焦点は温泉の中で素女が動かす太腿に移動する。太腿の動きは太腿の触感と融合する。「渾べて春陽を踏むに似たり」は春日の柔らかな光があたり、柔らかで温かく滑らかで潤った感覚を醸し出す。詩の後半ではそのような雰囲気は一掃され、この温泉の「蘭澤」はすばらしいけれども、自分はそれを享受する福分に恵まれていないと恨み事を述べ、わざとらしく怒った嬌態を見せている。宋玉の「神女の賦」では、雲夢の浦の神女を次のように形容している、「被服を嫷しくし、薄裝を侻しくし、蘭澤に沐し、若芳を含む。」[69]柳氏の結句はこれを換骨脱胎している。柳如是は詩の結末で薄絹を身にまとった残影を留めており、詩の焦点を巧妙に自分の方に引き戻している。

65　訳注：「竊黄」は浅い黄色を指す。

66　錢謙益・柳如是撰『東山酬和集』145頁。

67　「拍浮」は水に浮かぶこと、泳ぐことを意味する。南朝宋劉義慶『世説新語』任誕篇に、「畢茂世云う、一手に蟹螯を持ち、一手に酒杯を持ち、酒池中に拍浮すれば、便ち一生を了するに足る、と」とある。泳ぐことの連想から嚴氏は「太股」と考えるのであろうが、詳細は分からない。あるいはそのまま「泳ぐこと」と解すと、ここの訓読は「拍浮ぐは渾べて春陽を踏むに似たり」（素女が湯の中で泳ぐ様子はまるで春の陽光を踏むようだ）となる。

68　錢謙益・柳如是撰『東山酬和集』145頁。

錢謙益の第二首は次の通り：

山比驪山湯比香　山は驪山に比し湯は香に比す

承恩並浴少鴛鴦　恩を承け並び浴すも鴛鴦を少く

阿瞞果是風流主　阿瞞は果して是れ風流の主たり

妃子應居第一湯　妃子は應に第一湯に居るべし[70]

起句では黄山を驪山温泉に喩えており、唐の明皇（玄宗）と楊貴妃の旖旎な光景が唐突にこの詩の想像空間に取り入れられている。驪山の麓には温泉があり、唐の明皇は温泉宮を建て、後に華清宮と名付けた。このような背景があればこそ、第二句の「恩を承ける」が登場すると、白居易の「長恨歌」の「春寒浴を賜う華清の池、温泉　水は滑らかにして凝脂を洗う。侍兒扶け起すも嬌として力無く、始めて是れ新たに恩澤を承くるの時。雲鬢　花顔　金歩揺、芙蓉の帳は暖かくして春宵を度る」[71]というイメージが読者の視野に入ってくる、続いて「鴛鴦を少く」と言っており、錢氏が柳如是が今この黄山の温泉に居り、二人が鴛鴦となって戯れ、「恩を承け」る行為に及ぶことを渇望しているのではないだろうか？この詩は『初學集』においては異文がある。「第一湯」の後ろに小字の自注がついていて、「『南部新書』に、御湯の西北角は則ち妃子の湯なり、餘湯は邐迤[72]として、相い屬りて下る」[73]となっている。「阿瞞」は唐玄宗の宮中における隠語である。錢氏が玄宗皇帝を「風流主」と言っており、妃子湯は御湯の上手に在り、楊貴妃の身体を洗った温泉水が御湯に流れ込み、彼はその中に浸りきって、言うべからざる心地よさである。この詩の前半では「鴛鴦を少く」と言って柳氏が身の周りにいないことを嘆き、後半では明皇楊貴妃の故事を用いているのはもちろんモンタージュの技法を使っているのである。錢氏は柳氏が妃子湯の中に浸かっており、自分は御湯にいて、柳氏の身体を経由した温泉水を体で受け、明皇同様の快楽を享受する場面を想像しているのである。

柳氏はそれにこう応じた：

浴罷湯泉粉汗香　浴し罷りて湯泉　粉汗　香り

還看被底浴鴛鴦　還た看る被底に鴛鴦浴するを

黟山可似驪山好　黟山は驪山の好しきに似る可し

69　『六臣注文選』巻19、11b。

70　錢謙益・柳如是撰『東山酬和集』145頁。

71　唐白居易撰『白氏長慶集』（文淵閣『四庫全書』第1080冊）巻12、12a。

72　訳注：「邐迤」は曲がりくねって進むさまを意味する。

73　錢謙益『錢牧齋全集』の『初學集』、巻19、642頁。

白玉蓮花解捧湯　白玉の蓮花[74]　湯を捧げるを解す[75]

柳詩は錢氏の「鴛鴦」のイメージを承けて錢氏の詩よりもさらに艶っぽく大胆な展開になっている。周法高『足本錢曾牧齋詩註』「原註補鈔」は錢曾の「鴛鴦」の条の注を補って以下のように云う、「『開元天寶遺事』に云う、明皇興慶池に避暑し、妃子と水殿中に晝寢す。宮嬪闌に憑り。爭いて雌雄の二鸂鶒の水中に戯れるを看る。帝は時に楊妃を綃帳[76]の内に擁し、宮嬪に謂いて曰く、爾等水中の鸂鶒を愛するも、爭(いか)でか我が被底の鴛鴦に如かんやと。」[77]（嚴氏注：鸂鶒は俗に紫鴛鴦と称す）柳氏の詩の視覚性に富んだ身体は嗅覚の悦楽を帯びていることが暗示されており、それはつまり温泉から上がったばかりの少し汗がにじみだした温かな身体であり、その身体の放つ芳香が漂ってきているのである。それを次の句は「還看」の二文字で承け、前の句としっかり結び付けておいて、視点は温泉から上がったばかりの身体から、素早く「被底の鴛鴦」に移動している。錢曾は『開元天寶遺事』を引くだけで、明皇と楊貴妃が布団の下で着衣していたかどうかについては明らかにしていないが、柳氏の「被底」では「鴛鴦が浴し」ており、裸体であることは間違いない。「被底に鴛鴦浴するを」が何を意味しているのかについては読者の想像におまかせする。

錢謙益の第三首：

沐浴頻看稱意身　沐浴　頻りに看る意に稱うの身

刈蘭贈藥想芳春　蘭を刈り藥を贈りて芳春を想う

憑將一掬香泉水　憑(こ)う一掬香泉の水を將(もっ)て

噀向茸城洗玉人　茸城に向いて噀(ふ)きて玉人を洗わんことを[78]

錢氏は温泉の中で沐浴しているので、心身は非常にゆったりしており、温泉には香蘭や香草などを浮かせているので、さらに春らしさがただよう。すると突然、一掬いの水を茸城に吹きかけて、「玉人」を洗ってやりたいという奇想天外の発想が湧いてきた。「玉人」は、王嘉の『拾遺記』のフェティシズム的な意味を帯びた話に基づく：

蜀先主の甘后は……生まれながらにして體貌特異なり、年十八に至り、玉質の柔肌にして、態媚容冶なり。先主は后を白綃の帳中に致すに、戸外に於いて望む者は月下の聚雪の如し。河南玉人を獻じ、高さは三尺、乃ち玉人を取りて后の側に置き、晝は

74　訳注：「白玉の蓮花」は華清池の浴槽に湯を供給する白玉製の蓮華を指すのであろう。

75　錢謙益・柳如是撰『東山酬和集』146頁。

76　訳注：紗のカーテンを言う。

77　清錢謙益著、清錢曾箋注、周法高編、『足本錢曾牧齋詩註』の『初學集詩註』（臺北編者自印1973年）巻19、1397頁。

78　錢謙益・柳如是撰『東山酬和集』145頁。

則ち軍謀を講説し、夕べは則ち后を擁して玉人を玩び、常に玉の貴ぶ所は、德を君子に比ぶ、況んや人形を爲すに玩ばずして可ならんや？甘后と玉人は潔白にして齊い潤い、觀る者は殆んど相い亂れ惑い、嬖寵の者唯だ甘后を嫉むのみに非ず、亦た玉人を妬む[79]。

錢氏がこの典故を使ったのは、「玉人」を柳如是の皮膚が「潔白にして齊い潤」っていることの暗喩としてだけでなく、劉備が甘后と玉人の両方を抱いてふけった狂乱に似た官能の刺激とエクスタシーを想像してのことではなかったか？詩の中の「玉人」が柳氏を指すことは疑いがない。茸城はすなわち五茸城で、松江の別名である。柳氏は当時茸城の舟に滞在していた。「洗」と言っていうるには、錢氏が想像しているのはもちろん白皙の肌を露わにした柳如是である。

柳氏の唱和詩：

睡眼矇朧試浴身　睡眼　矇朧とす浴を試みるの身

芳華竟體欲生春　芳華　竟體[80]　春を生ぜんと欲す

憐君遥嘆香溪水　君の遥に香溪の水を嘆きて

蘭氣梅魂暗著人　蘭氣　梅魂　暗かに人に著くを憐しむ[81]

柳如是の身体は春そのものである。「睡眼　矇朧とす浴を試みるの身」には先に引用した白居易の「侍兒扶け起すも嬌として力無く」といった趣があり、アンニュイの美が描写し尽くされている。湯浴みしている間の身体はまどろみと覚醒の間を行きつ戻りつしており、春風が吹く中、こちらでは花がひっそりと綻び、身体全体が馥郁と香っている。この純白で何も身につけていない身体は錢氏が黄山から吹きかけてくる温泉水は、蘭気梅香の中にぴったりと纏わりついてくる。柳氏の四首の唱和詩の中で、この作品が最も錢氏の気持ちに寄り添っている（確かに「君を憐し」んでいるわけである）。

錢氏の第四首：

齊心同體正相因　心を齊しくし體を同じくして正に相因る

祓濯何曾是兩人　祓濯は何ぞ曾て是れ兩人なるをや

料得盈盈羅襪歩　料し得たり盈盈と羅襪もて歩み

也應抖擻拂香塵　也た應に抖擻して香塵を拂うを[82]

79　宋李昉等撰『太平廣記』（文淵閣『四庫全書』第1043-1046冊）、巻272、5a-b。

80　訳注：「竟體」は体全体を指す。『南史』謝覽傳に、「覽は意氣閑雅にして、視瞻聰明なり。武帝目送すること良や久しくして、徐勉に謂いて曰く、「此の生は芳蘭竟體なるを覺ゆ」」とあり、ここの「芳華　竟體」は『南史』謝覽傳を踏まえているらしい。

81　錢謙益・柳如是撰『東山酬和集』146頁。

「心を齊しくし體を同じくして」というのは、君は私の中に、私は君の中に在り、親密で隔たりが皆無であるという意味であり、次の「祓濯は何ぞ曾て是れ兩人なるをや」と併せ見ると、相思相愛の意味以外に、水と乳が融け合うような仲睦まじい愛情が鮮明に表現されている、つまり、錢氏は柳氏に再会したらともに入浴しようと求めているのである。詩の後半は、錢氏の凝視の焦点が柳氏の三寸の金蓮に移っている。後半の二句において、イメージの推移には一つのプロセスがある。「料し得たり」は錢氏の想像であり、柳氏が刺繡を施した靴を履いて、嫣然として自分に近づいてくる。その後でゆっくりと靴を脱ぐと、三寸の金蓮の小さな脚が目の前に姿を現す。纏足は古人の嗜好の一つであった。この二句の色情が紙面に踊っているではないか。柳氏が靴を脱ぎ、「抖擻して香塵を拂」った後、場面はどう展開するのか？詩の前半で二人は一緒に「祓濯」するとあるのだから、靴を脱いだ後は、必ず柳氏は服を脱ぎ始めるはずだ。

柳氏の返事：

旌心白水是前因　心を旌(あらわ)すこと白水のごときは是れ前因なり

覷浴何曾許別人　浴を覷(のぞ)くは[83]何ぞ曾て別人に許さんや

煎得蘭湯三百斛　煎じ得たり蘭湯三百斛

與君攜手祓征塵　君と與に手を攜えて征塵を祓わん[84]

これはいかに巧妙でいかに粋な表現であることか。『左傳』僖公二十四年に、「舅氏と心を同じくせざる所の者、白水の如き有り！」とあり[85]、「白水の如き有り」とは「河の如き有り」即ち河の神よご照覧あれ、「誓いを破らない」という誓詞である。（南朝梁の劉孝標「廣絶交論」に「青松を援(ひ)いて以て心を示し、白水を指して信を旌(あらわ)す」とある[86]。）柳氏は「心を旌(あらわ)すこと白水のごとき」と誓い、錢氏との永遠の誓いを固く守り、身を託したいという気持ちを露わにしている。表現は一層深くなり、この契は「前因」によって夙に定まっており、天の配剤であると述べる。柳氏の詩意は誠に雅やかで、きっぱりとしている。第二句は驚異的な表現である。錢氏の四首には濃厚な「竊視の欲望」に充ちあふれている。柳氏の次の句には、「欲を覷(のぞ)くは何ぞ曾て別人に許さん

82　錢謙益・柳如是撰『東山酬和集』145頁。

83　訳注：「女性の入浴シーンを男性が覗く」情景で連想するのは、桓温が尼僧の入浴を窃視していたら尼僧は腹を切り裂き内臓を露わにしたという典故（『搜神後記』）であるが、あまりにも殺伐とした話なので、ここの関連は薄いであろう。

84　錢謙益・柳如是撰『東山酬和集』146頁。

85　左丘明傳、晉杜預注、唐孔穎達疏、唐陸德明音義、『春秋左傳注疏』（文淵閣『四庫全書』第143-144冊）巻14、20b。

86　『六臣注文選』巻55、10b。

や」とあり、二人の縁は前世から定まったもので、永遠の誓いを固く守るという前の句を承けて、錢氏が自分の入浴を覗く場面を設定し、一方で錢氏の色欲の幻想を満足させつつ、一方では挑発的な表現を用いて自の身体を錢氏に託そうとする意思を相手に伝えている。詩の後半で「煎じ」た「蘭湯」は「三百斛」の多きにいたると述べ、さらに「手を攜えて」とも言っているのは、もちろん錢氏が旅から帰ってきたら「鴛鴦の浴」を設けて、錢氏のために「塵を洗」おうとの表明である。

四、『東山酬和集』の文學的・文化的余韻

これまで私は読者を錢柳の情感の空間に誘い込み、彼らの文学性を再現し、再構築してきた。一層また一層と『東山酬和集』というテキストが隠していた意味を白日の下に曝してきたが、開示された内容は驚愕と悦楽に満ち、読者を為すべきことを知らない事態に追い込んだのである。この詩集は詩酒の宴会とともに誕生し、その宴会には特定のソサイエティー（主に錢氏の友人と弟子からなる）が招かれ、酒を飲み茶を啜り、詩を賦して唱和しあった。『東山酬和集』は全部で九十七首の詩を収めており、1642年春に刊行され、錢氏柳氏の婚姻の引き出物の意味があった。この愛情を動力（dynamics）とする心理、創作とこの本が完成するプロセスにおいて、詩を作ることは、錢氏柳氏個人の行為であると同時に、個人化（individualized and individualizing）の行為であって、錢氏と柳氏が内心の世界を伝え探る媒介（agency）となった。彼らが互いに唱和し合う時、詩歌は同時に「媒酌人」（agent）となり、命を受けてこの恋愛劇を動かし、恋愛劇の形態を模写してみせた。二人の詩作が彼らを取り巻く集団によって読まれると、二人の詩作はこのソサイエティーの共有物となり、他人の参与と煽動を許す物語、事件に発展したのである。最後に、この詩集が刊刻流通されると、錢氏と柳氏の恋愛劇、詩作、それ以外の人々の唱和詩はさらに広い読者層の世界に入ってゆき、明末の恋愛観、妓楼の文化、及び当時や後世の美学や価値体系と互いに共鳴しあい、互いに対話しあう、弁証法的な関係を構築した。

錢氏柳氏の恋愛劇と彼らの詩作には演技の影がつきまとっており、個人の産物と公共の産物を兼ねている。これらの詩は当時芝居に仕組まれて上演され、見つめられ、議論され、消費された。その後別々の目的のもとに再演され、利用され、複製され、改訂された。この明末の恋愛・文学・出版事件は最後には明末文化の記憶の中で、燦然と輝く盛事となり、人々が感情を込め熱い視線を以て想像し、幻想し、自己を投射する場となったのである。『東山酬和集』は異なった時空で閲読され、『東山酬和集』をめぐる細部（ディテール）や

事件は、想像を加えられ、フィクションとなり、歴史化・物質化され、もともと二人の所有物であった器物も熱狂的に収蔵され、その象徴としての価値（symbolic value）は彼らの実際の価値を大きく上回っている。互いに異なったいくつかの柳如是の肖像、彼女の絵画や書法の真跡、彼女が使った化粧鏡（及びその榻本）、甚だしきに至っては、錢氏柳氏の二人が住んでいた紅豆荘の跡地に生えていた一本の紅豆樹から摘んできた紅豆でさえ珍蔵され、清代から今に至る少なからぬ文士や好事家の手により詩文・筆記として吟詠・記録の対象となってきたのである[87]。近年錢氏柳氏の情事はいくつもの長編小説に仕立てられ、連続テレビドラマや映画が何本も撮影された[88]。

『東山酬和集』が長く生き続ける魅力はいくつかの面から論ずることができる。先ず、詩集の主要な作者が錢氏柳氏の二人であること、これだけでも明末清初の読者が争って読んだ理由が納得できる。錢氏柳氏は当時の有名人である。錢氏は東林党の首魁、文壇の盟主であり、明清交替期に朝野の注目を集めた人物であった。柳氏は一代の伝奇的な才妓で、彼女に憧れる男性は雲の如くおり、四方の名士は彼女を一目見ることに光栄を感じた。二人の詩名は当時ともに高かったが、『東山酬和集』の特別な魅力は二人の名声のみによって確立されたわけではない。『東山酬和集』が時空を異にする数多くの読者に感染力を持ったのは、『東山酬和集』の中に収録された詩が、人を魅惑する非凡な力量を有していたからである。詩歌が錢氏柳氏の愛情関係に入り込むと、すぐさま「紅娘」[89]の役割を演じだし、この芝居の中で、愛情を伝え、二人のつながりをつけ、時には脇道に引き込み、疑惑を起こさせ、時には彩りを成し、二人を感情の渦に巻き込んでしまい、抜き差しならなくさせる。詩歌は積極的な仲人となり、錢氏柳氏の仲を斡旋し横やりをいれ、二人の情事のプロセスの曲折・生滅の契機となり、それらを形作った。相手の心を掴もうとすれば、先ずこの仲人を手なずけなければならない。成功の鍵は詩歌であるが、詩歌が失敗の原因とは限らないが、失敗すれば風情や詩意そして雅趣が減却してしまう。そして見たところ、この仲人はまさに称賛に値する。『東山酬和集』の最後の二題は「六月七日河東君を雲間に迎え、喜びて述ぶる有り四首」と「催妝詞四首」であり、錢氏柳氏が夫婦になる際に作られたもので、前題は唱和者が最も多く、後題は錢氏が自ら賦したものである[90]。宋代孟元老の『東京夢華録』娶婦には、嫁取りの

87　范景中・周書田編の『柳如是事輯』にはこれらの作品が数多く収められており、参考にされたい。陳寅恪『柳如是別傳』は彼の「紅豆を詠ず幷びに序」詩から書き始められている。陳氏の著書の序文には、「昔歳昆明に旅居し、偶たま常熟白茆港錢氏故園中の紅豆一粒を購い得たり、因りて錢柳因縁詩を箋釋する意有り」とある。氏の著書『柳如是別傳』１頁を見よ。

88　これらはあまりにも卑俗で退屈であり、根拠のない作品であるため、いちいち名前はあげない。

89　訳注：唐代伝奇『鶯鶯傳』の小間使いで崔鶯鶯と張生の仲立ちをする。

古い風俗を記録しており、「先んずること一日、或いは是の日の早きに、催妝・粧冠・帔・花粉を下す」とある[91]。成婚の前日、お祝いに来た人、あるいは新郎が詩を賦して新婦の化粧を催す、それが催妝詩もしくは催妝詞である。この二組の詩は、錢氏柳氏が仲睦まじい夫婦となったことの証人となり、文学が彼らの愛情生活の中で演じた輝かしい役割を際立たせている。「催妝詞四首」の第四首を見てみよう、「寶架　牙籤　書輪を壓し、筆牀　硯匣　動(やや)もすれば身に隨う。玉臺　自ら催妝の句有り、花燭筵前にて輿に細かに論ぜん。」[92]つまり新婚の閨にも詩や書物のために一席設けているのである（もちろん「玉臺」は『玉臺新詠』を指す。『玉臺新詠』には艶詩が多く、それが新婚の閨に出現するのは理の当然である）。

『東山酬和集』のもう一つの人を引き付けて止まない点は、『東山酬和集』が含んでいる色情（sexuality）のサブリミナルテキストである。明末の愛情観念の中における情は常に情欲の根底を帯びており、情欲と各種の美学・文化の元素は互いに浸透し合い、甚だしい場合には融合して一体化することもあり、分割することは難しい。先に分析した最初の一組の詩[93]に十分顕在化していたように、錢氏柳氏の二人は誘惑、色事の芸術の名人である。『東山酬和集』というテキストが発展拡大していった要の部分は、錢謙益の女性の身体（柳氏の身体）に対する想像と凝視である。しかし、『東山酬和集』を読めば明らかなように、柳氏が先ず錢氏の超現実的な想像を挑発したのであり、柳氏は一貫して錢氏の欲望を玩んでいたのである。この身体についての論述（discourse）は――私はこれをひとつの論述とみなすのだが――このテキストには自覚的確信犯的な色情が含まれ、また双方の声・姿態・美観と権力の意識が交錯してはいるが、純粋な官能や肉欲の層に止まり続けているわけではない。例えばすでに分析した「禊後五日、黄山の下の湯池に浴し、四絶句を留題し、遥かに河東君に寄す」四首について言うと、その内容は、錢氏が想像する柳氏の身体と、柳氏とともに湯浴みしたいという超現実的な想像であり、柳氏の返しの放縦性と遊蕩性ははるかに錢氏の作品を超えていた。しかし注意しなければならないのは、錢氏のこの四首の作品は遥かかなたの錢氏に寄せたものであり、錢氏の柳氏に対する強烈な愛情と肉体への渇望を反映しているのであるが、柳氏の返しは、一糸まとわぬ裸体と、身を錢氏に委ねたいという暗示を除けば、誓いを守り、

90　錢謙益・柳如是撰『東山酬和集』146-160頁。

91　宋孟元老撰『東京夢華錄』（文淵閣『四庫全書』第589冊）巻５、4a。

92　錢謙益・柳如是撰『東山酬和集』158頁。

93　訳注：二人が最初に唱和した詩、柳如是の「庚辰の仲冬、牧翁を半野堂に訪ない、長句を奉る　河東柳是」詩と錢謙益の「柳如是山堂を過訪し、枉げて詩もて贈らる、語は特に莊雅にして、輙ちに來韻に次して奉答す　牧翁」詩を指す。

錢氏に嫁ぎたいという決心から成っている。自分に付き従う恋人が存在し、さらに彼女を本当に妻とすることができた。『東山酬和集』のこれら一連の詩の後に来るのは「六月七日河東君を雲間に迎え、喜びて述べる有り四首」であって、錢氏は柳氏を雲間に迎え二世を契ったのである。

『東山酬和集』は特別な意味をもって編纂された文集であり、錢氏によって編纂されたのかもしれないし、錢氏の弟子が錢氏の意を承けて編集したのかもしれないが、1642年に刊刻された。『東山酬和集』の冒頭には二篇の序文が置かれており、錢氏の友人の沈璜と門人の孫永祚によって書かれた。『東山酬和集』には沈氏の詩が一首収められており、「辛巳元夕、牧翁は我聞居士と偕に酒を載せ燈を攜えて我が荒齋を過り、牧翁は席上にて詩成り、韻に依りて和し奉る」と題され、錢氏柳氏の韻（錢氏二首、柳氏一首）に和した作品である[94]。「『東山酬和集』序」の中で、沈氏は隠者のイメージを帯びて登場し、錢氏柳氏が夫婦となり、婚姻を結んだことをしきりに慶賀している。錢氏と柳氏の来訪を回想して沈氏は次のように述べている：

> 時に於いて竹戸蕭閒とし、清陰寂歴たり。白雲殘雪、人面を映して分かたず。蘭氣梅香、清言と別つ無し。談諧　間ま作こり、獻詶煩わしからず。翰を染め文を論じ、重ねて西窗の燭を剪る。燈を張げ席を促し、共に北海[95]の尊を開く。洞裏に簫を吹き、飈輪を嬴女[96]に下す。筵前に曲を度し、月駕を素娥に駐む。既に醉いては言に歸らんとし[97]、逡巡して遽なりと稱す。寒さは春の淺きに輕く、即席の詩は立ちどころに成る。月は花輪を避け、倚答の詞　麗を加う。洵に呉都の盛事、實に藝林の美譚なり[98]。

ここで沈氏は清雅で睦まじく楽しげな場面を描き出している。酒を飲みながら詩を応酬する良き宴、名士と佳人が一堂に会す、この世の心にかなった楽しみ事でこれに勝るものはあるまい。「洵に呉都の盛事、實に藝林の美譚なり」とあるので、呉中の人士はみな錢氏柳氏の慶事を快事とみなし大いに賞賛したように読める。（実は沈氏は出鱈目を言っているのである。当時錢氏の正室はまだ健在で、正妻と同等の礼を以て妓女を娶ったため、呉中の郷紳たちは大騒ぎしたのである[99]）

錢氏柳氏の唱和の作について沈氏は次のように考えている：

94　錢謙益・柳如是撰『東山酬和集』135頁。

95　訳注：「北海」は後漢の孔融を指す。北海郡の太守であったことにちなむ。後漢書の孔融傳に、「坐上に客恒に滿ち、尊中酒空しからざれば、吾憂い無きなり」という孔融の言葉が残っている。

96　訳注：漢語大辞典に、「秦の穆公の女、弄玉を指す。秦は嬴姓であったので、秦女を嬴女と呼んだ。唐李白「鳳凰曲」に、「嬴女玉簫を吹き、吟じて天上の春を弄ぶ」とある」と云う。

97　訳注：『詩經』周南「葛覃」に、「言に告げて言に歸らんとす」とあるのを用いた。

98　錢謙益・柳如是撰『東山酬和集』119頁。

其の東山の葱嶺を觀るに、贈るは切に聲を同じくす。白首紅顔、感ずること深くして相い和す。心を旌(あらわ)し信に白水に誓い、詞を通じ遥かに微波に託す。其の婉孌情を定むるに及びては、低廻して別れを惜しむ。南湖の七字、文無を折りて以て媒と爲す。南國の千言、柳枝を扳(お)りて贈と爲す[100]。

この序文で沈氏は錢氏柳氏の詩文を批評しているが、まことに巧みである。「聲を同じくす」とか「相い和す」とは、錢氏柳氏がお互いをよく理解し、意気投合していることを強調している。「文無を折りて以て媒と爲す」の中の「文無」とは当帰の別名である。(『古今注』に、「古人相い贈るに芍藥を以てし、相い招くに文無を以てす、文無は當歸なり、芍藥の一名は將離なり」とある[101]。) 沈氏がここで指しているのは、錢氏の「陌上花樂府、東坡の呉越王妃の事を記するなり。臨安道中にて感じてこれに和す、其の詞に和して其の意に反し、以て寄する有り」三首であり、柳氏は錢氏にそれらのすべてに唱和した[102]。蘇軾は九仙山に遊び、里中の児童が「陌上花」を歌うのを聞き、その故を問うと、父老が「呉越王妃は毎年必ず臨安に帰省しましたが、呉王は手紙を妃に送り、「陌上の花開かば、緩緩として歸る可し」と書いたそうです」と答えた[103]。このスタイルの詩は第一首の末句は「緩緩として歸る可し」で終わることになっており、錢氏の三首の詩の末尾はすべて「緩緩として歸る可し」となっている。「狂夫は合に堂堂と去る可からず、小婦は翻歌して緩緩として歸る」、「請う看よ石鏡の明明に在るを、妝臺を撇てて緩緩として歸るに忍びんや」、「花開かば容易に紛紛として落つ、春暖かにして緩緩として歸らしむるを休めよ」[104]とあり、錢氏はこの詩で柳氏に対する強烈な思慕の情と矢のような帰心を伝えようとしたのであった。錢氏が詩篇に「媒」すなわち仲立ちの役割を命じ、自分に代わって求愛させたと述べているが、まさに我が意を得ている。沈氏の次の記述は最も重要である。

昔鄂君の[105]繡被、徒だ櫂歌に感説し、蜀國の朱絃[106]、但だ琴曲に留連す。豈に今日の、清文を以て蒲葦と爲し、微詞を以て緡絲と爲し、贈るに芳華を以てするも、禮義に止

99　陳寅恪『柳如是別傳』639頁から642頁参照。

100　錢謙益・柳如是撰『東山酬和集』119頁。

101　明曹學佺撰、『蜀中廣記』(文淵閣『四庫全書』第591-592冊)、巻64、22a。

102　錢謙益・柳如是撰『東山酬和集』143-144頁。

103　宋蘇軾「陌上花三首幷びに引」に、「陌上　花開きて胡蝶飛び、江山猶お是れ昔人非なるがごとし。遺民　幾度垂垂と老いるや、遊女長歌して緩緩として歸る。」(其の一)、「陌上の山花　無數に開く、路人爭いて看る　翠軒の來るを。若爲(も)し堂堂と去るを留め得れば、且つ更に緩緩として回るに從教(まか)せん。」(其の二)「生前の富貴は草頭の露、身後の風流は陌上の花。且つ遲遲を作して君は魯に去り、獨り緩緩を歌いて妾は家に回らん。」

104　錢謙益・柳如是撰『東山酬和集』144頁。

まる者に如からざらんや。君は方に閨閣に珩璜（の德）あり[107]、山林に裘褐（を纏う隱者の風）あり。清旭の綃帷に、酉室[108]羽陵[109]の籍あり、夜窗の絳蠟に、三元八會の書[110]あり。逝(あ)あ將に丹華を刊落し[111]、妖冶を滌除せんとす[112]。

もしも先の一段を引用して、錢氏柳氏の仲睦まじく情緒纏綿たる間柄に合理的基礎を与えようとしたとすれば、この一段は『東山酬和集』の現実離れしたエロティズムを道德的合理性に転化し、道德的な注解を与えようとしているものだと言えよう。対になる作品である孫永祚の「東山酬和の賦」にも、類似の修辞的戦略と注解の方向性が見られる。この賦の大部分は『東山酬和集』の詩文から換骨奪胎したもので、二人の作品は、「花影　箋を拂い、麗句斯に在」るものであるが、「玉聲　曲を度(うた)い、清音未だ亡びず」である。新婚の夜「璫を垂れ珮を委れ、甲帳を陪いて横陳す」る際でさえも、なお「禮を敦くし詩を説き、乙藜を吹きて翰を染」めていたことを強調する。孫氏は最後に次のように総括する：

豈に宋玉の夢中に恍惚とし、江生の水上に彷象とし、陳思の雒靈に感じて空廻し、相如神女に擬して永えに歎くに若んや。夫の曲を誤りて顧を引き[113]、燭を秉りて文を投ずるが若し。笑いては柳枝に倚りて起草し、醉いては桃葉を扶けて裙に書す[114]。掌

---

105 訳注：春秋時代、楚王の弟鄂君子晰が舟に乗ったところ、舟を漕ぐ越女が歌をうたい、思慕の情を表明した。鄂君は「行きてこれを擁し、繡被を舉げてこれを覆」ったという。劉向の『説苑』善説篇に見える。

106 訳注：「蜀國絃」は樂府相和歌辭の題。南朝梁簡文帝、隋の盧思道、唐の李賀などの作品がある。「朱絃」は『禮記』樂記に、「清廟の瑟、朱弦にして疏越なり、壹倡して三たび嘆じ、遺音有る者なり」とあり、「朱絃三嘆」という成語が成立し、音楽の精妙さを形容する。

107 訳注：「珩璜」は『詩經』鄭風の「女曰雞鳴」に、「子のこれを來くを知らば、雜佩を以てこれに贈らん」の「雜佩」（いろいろな宝石を三本の糸につづって作る装飾）の材料の一つとして毛伝があげるものの一つ。ここでは柳如是が夫の友人を大切にする妻であることを言う。

108 訳注：湖南省沅陵縣境西北にある小酉山の石穴を指す。「酉陽」とも言う。『荊州記』に、「小酉山石穴中に書千卷有り、相い傳う秦人此に學び、因りてこれを留む」とある。

109 訳注：羽陵：『穆天子傳』卷五に、「仲秋の甲戌、天子東游し、雀梁に次り、羽陵に蠹書す。」郭璞注に、「書中の蠹蟲を暴すを謂う、因りて蠹書と云うなり」とある。後に「羽陵」で秘籍を所蔵する場所を指すようになった。錢謙益も「毛子晉六十壽序」で「其の書を頌さば則ち酉陽羽陵たり。」と「酉陽羽陵」を並称している。

110 訳注：「三元八會」は道教の語彙。三元は日、月、星を指し、三元に上、木、火、土、金、水五行を加えると八會となる。倉頡が字を創造する以前の「雲篆」、「天書」を言う。『雲笈七籤』卷七に、「『道円大論』に曰う、「一は陰陽、初めて分かれて三元、五德、八會の氣有り、以て飛天の書を成す。」とある（『漢語大詞典』）。

111 訳注：「丹華」はおそらく白粉を指す。化粧を落とす、あるいは淡くして妓女であったころの艶めかしさを取り除くという意味であろう。こうした「丹華」の用例は錢謙益の『初學集』『有學集』に多数ある。「丹華を却けて御(もち)いず、盛年に黽勉(つとめ)たり」など、婦德を称える表現である。

112 錢謙益・柳如是撰『東山酬和集』119-120頁。

記は憂いを行役に紓め、援桴[115]は壯を從軍に賈(まね)く。萊公は諫を[116]蒨桃に受け、學士は朝雲[117]に鼓腹す。一時の艶事を誌し、千古の談芬に資せざる莫し。況んや良緣の偶(ぐうよう)なるに非ず、洵に佳人の得難きにおけるや。鏘として玉簫に和鳴し、諧として瑶瑟よりも婉孌なり。禮義に止まりて淫せず、國風の好色に等し。詶唱を曲房に倚り、風流を通國に傳う。芍藥の盈篇を寧んじ、龍鸞の共に織るを競う。風人よりも靡濫すと雖も、亦た麗則を傷らず。玉臺の新聲に儷(ひってき)し、彤管[118]弈有るより猗(うつく)し[119]。

この一段は典故が数多く用いられてはいるが、記述の重点はつかみ易く、二人の「艶事」は実は学士佳人の天から賜った良縁であり、神女と襄王の巫山雲雨に見られるような放肆な情欲とは異なっていることを強調している。二人の詩文は、華麗で風流ではあるが、軽佻浮薄ではなく、けっして猥褻な作品であるとみなしてはならないと述べる。沈氏の序文で「清文を以て蒲葦と爲し、微詞を以て緡絲と爲し、贈るに芳華を以てするも、禮義に止まる」と表現されていたことを、孫永祚はさらに率直に、「色を好みて淫せ」ざる「國風」や、「情に發し禮義に止まる」「變風」を持ち出して『東山酬和集』の錢氏柳氏の唱和の作を形容している。

沈氏孫氏二人の説が正しいかどうかは暫く置くとして、二人は確かに錢氏の「知己」であった。『東山酬和集』がここまで形成されるにあたっては、必ずや機能的で政治的に正しい（politically correct）枠組みに、『東山酬和集』の華麗で艶冶な発想を封じ込めてしまって初めて公衆が閲読する空間に流通させることができるのである。これはまさに、錢氏が婚礼を行った後は、柳氏は必ず妓女の身分と画舫に別れを告げて初めて礼

---

113 訳注：呉の周瑜は音律に通じ、宴会中に楽団が演奏を間違えると、すぐに振り返ったという故事を指す。「曲に誤り有らば、周郎顧みる。」（呉書周瑜傳）

114 訳注：『宋書』羊欣傳に、羊欣の父が烏程の令となった時、欣は年十二歳、王獻之が呉興太守であり、彼を可愛がった。欣があるとき新絹の裙を着て昼寝していると、獻之が県庁に入ってきて、この姿をみるなり、「裙に數幅を書して去」ったとある。

115 訳注：「援桴」は太鼓の枹。枹を持って軍隊の指揮を執ること。『呂氏春秋』執一に「桴(ばち)を援(と)りて一鼓し、三軍の士をして死を樂しむこと生の若くせしむ」とある。

116 訳注：『詩話總龜』巻二十二に、寇萊公寇準の蒨桃という名の妾の話が出てくる。「寇萊公に妾有り蒨桃と曰う、公會に因りて歌者に贈るに束綾を以てす。蒨桃は二詩を作して公に呈して曰く、一曲の清歌一束の綾、美人猶お自ら意輕きを嫌う。知らず織女螢窻の下、幾度梭を抛げて織りて成るを得るや。風勁く衣單にして手は屢呵し、幽窓は軋軋として寒梭を度(わた)す。臘天　日は短かくして尺に盈たず、何ぞ燕姫一曲の歌に似るや、と。公和して曰く、將相の功名終に若(いかん)何、急景の飛梭に似たるに堪えず。人間の萬事　何ぞ問うを須いん、且つ尊前に向いて艶歌を聴かん。翰府名談。」

117 訳注：「朝雲」は蘇軾の妾であり、「學士」は翰林學士であった蘇軾を指す。

118 訳注：「彤管」は軸が赤い筆。女性が筆記に使用する。

119 錢謙益・柳如是撰『東山酬和集』122-123頁。

教と倫理が支配する家庭の構造の中に入り込むことができるし、またそうしてこそ、秩序が確立され、家庭は「長治久安」（長期にわたる安定）の状態になるのと同じことなのである。錢氏と柳氏の婚礼の後は、傍観者の想像・妄想が停止してこそ、柳如是は柳夫人」と称することができるのである。それ以降は錢氏は自分と柳氏の風流韻事は「芸林の美談」となり、『東山酬和集』は彼らの「因縁」と「前因」を証言する風雅の書となるであろう、という希望を錢氏は抱けるのである。柳氏の容姿と身体は寝室の中で、錢氏一人によって鑑賞されるべきであり、関係者以外立ち入りが禁止されるはずであった。

ところが、錢氏柳氏の情事と玉臺新詠風の色彩を濃厚に帯びたテキストが公共の領域に投入された時、読者たちが沈璜や孫永祚らの序文に導かれて『東山酬和集』を閲覧してくれるかというと、そうは問屋が卸さなかった。「高唐賦」「神女賦」「登徒子好色賦」「洛神賦」など多くの賦の前には序文がついていたではないか？しかしいわゆる「諷諫の意」はその意図とは正反対の方向に受け取られただけであった。沈璜の序文はほとんど四六駢体文に近く、孫永祚の作品は、もともと賦の文体で書かれていた。二人の華麗な修辞は、元来伝統的な艶冶な賦に似ており、文中には古代の風流で荒唐無稽な故事が縦横に引かれているため、錢氏柳氏の事跡がそれらの故事とは違うのだといくら宣伝しても、結果は意図とは逆の方向に向かったのである。俗に「此の地に銀無し、蓋(おお)わんと欲して彌(いよ)いよ彰(あら)わる」という通りである。

書物の冒頭に沈璜と孫永祚の序文を冠して、集中の詩文が華麗で艶冶な発想を封じ込めて礼と義の枠組みに引き戻し、他人の妄想を止めさせようとしたのだが、『東山酬和集』は結局のところ「開放された書」（an open book）であり、古今の読者は絶えず錢氏柳氏のテキストの行間にかくれた色事を凝視し、妄想を逞しくして「置換」「偸窺」（のぞき）「入迷」（とりこになる）の快楽を享受したのであった。その辺りの事情は、上述した程嘉燧の二首の詩と無関係ではあるまい。程氏の第二首の唱和詩は適切に錢氏柳氏の因縁を讃美して詠じており、それ以後の唱和詩の基調を決定した。しかし、程氏の第一首の唱和詩の雰囲気と第二首の雰囲気とはかなり異なっており、詩の中には昔日の柳氏に対する慕情と思い出が充満していて、情緒纏綿、自己憐憫の情に溢れている。程嘉燧は当時・後世の柳如是を敬慕する文士を代表しており、その詩は『東山酬和集』の外の世界の読者たちが自己を投影し、同一化し、模倣を行う空間を開いたのであった。程氏の詩は、また『東山酬和集』に収められた錢氏の欲望の指摘を可能にする「反テキスト」（counter-text）と、「主調とは異なる声」（an alternative voice）を構成している。

おそらく、錢氏はすでに程氏が構成している『東山酬和集』の空間を転覆させる力と脅威を自覚していたであろう。彼の『初學集』において、『東山酬和集』が収める錢氏柳氏の作品は「東山詩集」各巻に収録されている。「庚辰仲冬、河東君至りて半野堂に止まり、長句の贈有りて韻に次して答え奉る」の詩題の後、程氏の「次韻」の作を付録として載せているが、第一首を省略して第二首しか収録していない[120]。さらに、『東山酬和集』の程氏の唱和詩を読むたびに、「半野堂にて柳如是に値うを喜び、牧齋の韻を用いて贈り奉る」の中の「喜」一字に不審を抱いていた。詩の情緒と「喜」字が不協和音を奏でているのだ。後に程氏の『耦耕堂集』を調べると、案の定、程氏の詩題は「虞山の舟次、河東君に値い韻を用いて輒ちに贈る」となっていて、『東山酬和集』本の「喜」字がないのである[121]。程氏が当日の半野堂で「應景」[122]してこの一語を止むを得ず加えたのか（原注：その後自作を編集するとき削ったか）。あるいは『東山酬和集』の「喜」字は錢謙益が付け加えて人の目をごまかそうとしたのか、あるいは編集作業に当たった錢氏の門人が、程氏の原題が「增慶」[123]の意にそまないと考えて追加したのか、事情は明らかでない。

120 錢謙益『錢牧齋全集』の『初學集』、巻18、616-617頁。
121 程嘉燧『耦耕堂集』耦耕堂詩巻下、19a（127頁）
122 訳注：その時の事情にあわせること。
123 訳注：喜びを益すこと。